参考資料:バリントの著書よりの抜粋

文献 A: Balint,M.,Thrills and Regressions, Tavistock Publications,1959(バリント スリルと退行 中井久夫・滝野功・森茂起訳 岩崎学術出版社 1991)

文献 B: Balint,M.,Basic Fault:Therapeutic Aspects of Regression,Tavistock Publications, 1968.
(バリント 治療論からみた退行 中井久夫訳 金剛出版 1978)

※ 傍線は訳書では傍点あるいは太字。**太字**は発表者が強調したい語句。[ ]は発表者による付加。( )内の原語は訳書にすでにあるか、カタカナのルビになっているものも含まれる。

○「調和的・相互滲透的渾然体」
「魚にとっての水のごとく」
「物質(matter)」と「対象(object)」の違い
「友好的な広がり(frendly expanses)」
(訳書 B pp.94-6)

人間的努力の一切の目標は、環界との間に一切を包摂する調和を樹立――というかむしろ再建――すること、平和裡に愛せるようになることである。

(中略) 生物学的事実から出発しよう。われわれの現知識によれば、胎児は極度に環界依存的存在である。幼児、まして成人の比ではない。その結果、胎児が万事好調で整然と発育するためには、環境が二六時中胎児の欲求をほぼ完全に満たしている必要がある。需要と供給に大較差が生じれば激しい擾乱が生じ、生命の危険さえありうる事態となるだろう。

(中略) この環界は、しかし、おそらく未分化であろう。まず、環界中にまだ対象[発表者注:object=固い、輪郭のはっきりした、違和・抵抗 objection を示すもの。文献 Ap.95 参照]が一つもない。また、ほとんど無構造である。どこから個体か、境界不鮮明なことも強調しなければならない。環界と個体とは相互に滲透し合い、両者は一種の**"調和渾然体"(a harmonious mix-up)**中に存在する。この"調和渾然体"の好例は**海水中の魚**である(これはいちばん古型でいちばん広い範囲でみられる象徴だ(――旧石器時代の彫刻にもみられる――訳者)。**エラの中の海水、口の中の海水が海の一部か魚の一部かなどと問うのは愚問である**。胎児もことは同じである。胎児、羊水、胎盤は、胎児と環界である母親との複雑に入り組み滲透し合った渾然体である。

(中略) われわれは大気を利用する。実際、大気なしでは生きられない。われわれは大気を吸い一部を体内にとり込み、われわれの欲するものを利用する。それから、われわれが厄介払いしたい物質を入れて吐き出す。一向に注意しないでこれだけのこと全部をやる。実際、空気があってくれなくては困るのだが、質と量が十分ある間は全然気にとめない。この種の環界はただ単純に、なければならないもので、しかも存在する限り――たとえば十分な空気をわれわれが得ている限り――その存在を当然のこととし、一箇の対象とはみなさない。すなわち、われわれから分離したものとみなさない。ただ利用するだけである。環界が変われば、たとえば成人の場合、空気の供給に邪魔が入れば、状況は突然変化し、一見備給を受けていないかにみえた環界が非常に大きな重要性を持つようになる。すなわちここで、その潜在的であった真の備給が顕在化する。

水魚の関係同様、われわれと大気の関係にも鮮明な境界線などない。肺の中の空気、胃腸の中の空気がわれわれの一部かどうか、大気とわれわれとの正確な境界線はどこに引かれるか、などは愚問だ。われわれは成人になっても大気と一種のほとんど**調和的な相互滲透的渾然体**をつくって生存する。

(中略) 私の理論にしたがえば個体は生物学的にもリビドー的にも環界と強く関係を結んだ状態でこの世に生まれる。出生以前には自己と環界は調和的に"濠然一体化"している。事実両者は相互に滲透し合った存在である。すでに述べたように、この世界にはまだ対象はない。あるのはただ、限界のない物質というか広がりというか、そのようなものである。

出生が一つの外傷であるのは、環界を根本的に変えて、この平衡状態をくつがえすからである。この外傷は、さもなくば現実に死が待っているぞと脅かしつつ、新しい適応形式を強いる。この適応から個人と環界との分離がはじまる。少なくともかなり強く速められる。自我を含む各種**対象**が、**物質渾然体**から分離する。無限界の**広がり[expanses]**の調和が破綻して**対象**が分離して出現する。**物質**[matter 語

源は mother]は**対象**[object]より**友好的**だった。対象には堅固な輪廓、明確な境界線がある。これからはこの輪廓を認識してゆかねばならず境界を尊重しなければならない。リビドーは今までのように均一な流れとなってエスから流れ出て環界に至るわけに行かなくなる。成立途上の対象に影響されてリビドーの流れには濃淡が方々に発生する。

環界の一部あるいは何かの対象との関係が発生展開しつつある時、その関係が、その以前に存在した波風一つも立たぬ調和と反対で、この対照性が苦痛な場合、リビドーの自我への退却がありうるし、それをきっかけとして従前存在した最初期段階の”一体”感を取り戻す試み[=退行]が始まることもある。

○「オクノフォリア」「フィロバティズム」(訳書 A pp.35-47)

最初にオクノフィリアを取り上げよう。オクノフィリアにおいては対象関係の存在が絶対の前提条件であるが、その裏に恐怖が働いていることは明らかである。この事態をみごとに語りつくすものが、私の選んだギリシャ語[省略]である。意味は「しがみつく」「尻ごみする」「ひるむ」「ためらう」であるが、そうなるのは裏に何かの対象に対する恐怖あるいは羞恥あるいは憐愍があってのことだという含みがある。むろん、自分の自由になる対象が一つはなければならない。でなければしがみつけないからである。こうしてみるとオクノフォリックな世界とは、いくつかの対象と、対象と対象とを隔てる**恐ろしい空っぽな空間**とでできている世界である。オクノフィル(オクノフォリックな人)の人生とは、対象から対象へと渡り歩く人生であり、渡る中途の空っぽな空間の滞在時間はできるだけ切りつめようとするのである。恐怖は対象を離れることによって起こり、対象と再結合してしずまる。(中略) 対象への欲求は絶対である。欲求を感じつづけている間は、対象がいてくれなければならぬ。さらに欲求が存在している状態においては、対象へのおもんばかり、思いやり、気づかいはまったくなされえないのである。要求は満たしてくれてあたりまえなのである。

対象あるいは部分対象へのオクノフィリックなしがみつきは、精神分析においてもっともよく研究されてきた対象関係である。そのもっとも重要な性質は、おそらく、いかなる場合でも欲求不満に陥ることは避けられないということであろう。(中略) まず、対象がいくらやさしく当人に波長を合わせてくれたとしても、対象には対象自身の人生があり、自分のために生きねばならない時がある。

(中略) ほんとうの目標とは、対象によって抱きかかえられることであり、対象に必死にしがみつくことではない。この「抱きかかえられること(holding)」は**おのずと**起こらねばならないのものである。そうしてほしいという願いを言い表すことはもとより、言い表そうという欲求もあってはならない。**われわれの誰しもがもっとも強く願っている目標とは、おのれの周囲の人間的環境が、こちらが頼まなくてもわれわれの願い、特にわれわれの安全保障への願いを満たしてくれることである[発表者注:土井のいう「甘え」との類似に注目]。**安全保障を要求すること、ましてや力づくでおのれの対象を動かしておのれの安全保障を与えるようにさせること——これがしがみつきなのであるが——は必ず屈辱的であり、次善といってもぐっと値打ちが下がる。この種の関係はアンビヴァレンツをもたらさずにはおかない。

ところがフィロバット(フィロバティックな人)の世界は全くの別世界である。(中略)操縦士は高空にあって、ヨット乗りは大洋のまっただ中にあって、スキーヤーは斜面にあって、ドライバーは道路にあって、スカイダイバーは空中にあって、いずれも安全感に欠けるところがない。危機感、恐怖感が起こるのは、対象が現れてこれに対応しなければならない時だけである。(中略) フィロバットの生き方は、**友好的な広がり**の中に生きつつ、対象は危険を秘めているのもので対象との接触はうっかりできないと慎重に回避してゆくというものである。

オクノフィルが安全な**対象**と接触していさえすれば自分は安全だという錯覚の中に生きているとすれば、**フィロバットの幻想は、自分がそなえている装備[とスキル]さえあれば他に対象は必要としない、ましてや特定の一対象などはいらないという幻想**である。オクノフィルの思い込みが、自分の選んだ**対象**は自分に対して鍵が鍵穴に対するようにぴったり合わせてくれるであろうし、自分を庇護して危険が潜んでいるかもしれない、なじみのない空虚な空間から守ってくれるというものであるとすれば、フィロバットは自分の装備を使えばどんな状況にも確実に対処できると思い込んでいる。**世界全体の方が**鍵が鍵穴に対するようにぴったりあわせてくれるのであり、(中略) オクノフィルは、自分の対象に好意をもたれ、ひいきにしてもらえると思い込まないとやって行けないが、フィロバットは”世界”を征服する

のは自分に備わった力だけで十二分であり、**信頼するに足らない個別的な対象の好意などにすがることは問題外**だと思っている。

○フィロバティズム的人間にとっての「スキル(skill)」「四大(地水火風)」のごとく両タイプに共通する「万能感」(訳書 B pp.97-100)

外からみれば、オクノフィリア的人間は自分の対象関係にリビドーを過剰に備給する途を選んだ者となる。これと対照的に、フィロバティズム的人間は、みずからの自我機能に過剰備給して、その方向でほとんどあるいはまったく対象の援助なしで独力で自己を維持するための一種の**技量(skill)**を身につけてゆく。

(中略) 育児があまりの欠陥育児、鈍感育児でさえなければ、環界のところどころは、環界が持ち合わせていた一次備給をいくらかなりとも残していようし、そこが私のいう一次対象となり、幼児の一次対象に対する関係や、より長じてからの一次対象由来の対象に対する関係も、それ以外の対象すべてとは違ったより原初的な関係となり、そうあり続けるであろう。このような原初対象とは、何よりもまず、自分の母親だが、また、不思議なことに、多くの人々の原初対象にはいわゆる**四大**すなわち**地水火風**——もっとも火は他の三者に比べて稀だが——も加わる。四大は古型の母性シンボルである。[これらの「物質」の特徴はその**破壊不能性**にある。砂の城を壊しても砂は残る。蛇口を指で押さえれば水は止まるが、指を離せば再び吹き出す。文献 B p.181 参照]

(中略) オクノフィリア的関係においては、(中略) 対象はそれなしでは生きられないほど大切な支えである。対象から分離させられそうな気配が一寸でもあれば強烈な不安が生じる。ここで一番よく使われる防衛は**しがみつき**である。(中略)対象の重要性は途方もなく大きくなるため、対象への配慮の余裕などなくなり、自分と別個の利害関係など持ってもらっては困る、とにかくそばにいてくれなければ困る、ことになり、事実、対象の存在はいうまでもないものとされる。この型の対象関係より生じる結果には、まず**(1)対象の過大評価**がある。(中略)次に、**(2)本人がその対象から自立するために必要な個人的技量の発達が多少なりとも抑止**される。

(中略) [フィロバティズムの]場合、対象は冷淡なもの、我関せず焉のもの、いや信頼できない欺されるもので避けるに如くはない、とされる。**対象回避のためにある種の個人技量(skill)の発達が不可欠**となる。これは、**対象を欠いた広がり**たとえば山岳、砂漠、海洋、大気等——これらはすべて潜在的に一次対象、より正しくは一次物質の部類に入る——と調和してその中における移動の自由を確保あるいは再獲得するための個人的技量で、とりもなおさず、それがその者の自我となるが、**このことに対応してその人の対象関係は妨げられる[人々と親密な関係をつくり維持する能力を失ってしまった人々である(訳書 A p.170)]。**

以上の[オクノフィリア、フィロバティズムという 2 通りの]原初的対象関係の共通項は、そこでは対象がいうまでもないものとされることである。(中略) この調和的二人関係において、自分の願望、関心、要求の所有をゆるされるのは一方だけである。もう一方——とは[オクノフィリア的人物にとっての]**対象**、あるいは[フィロバティズム的人物にとっての]**友好的な広がり**のことだが——がまったく自動的に同一願望、関心、期待を持つべきなのは論をまたず、わざわざ調べる必要もないとされる。そのため、これを**万能感**の状態とよくいう。万能感という表現はいくらか見当はずれだ。(中略) 万物が現に調和して存在するのだから。

○「沈黙症例」とそこにみられる「新規蒔き直し(new beginning)」(訳書 B pp.188-9)」
○沈黙の意味の二類型(訳書 A pp.119-20)
○オクノフォリア的な治療技法とフィロバティズム的な治療技法の比較(訳書 A pp.129-30)
○「友好的広がり」の再発見(訳書 A p.126)
○相互滲透的調和渾然体の中で患者が分析者と共に生きること(訳書 B pp.181-2)

「患者は、当時までにすでに約二年間精神分析を受けていたが、面接時間の始まりからたっぷり三〇分以上押しだまったままであった。分析者はそのことを受容した。そして、患者の中で何が起っているかがおおよそ分ったので、全然、沈黙に干渉しようとせずに待った。実際、分析者はイヤな感じがしなかったし、何かしなければならない強迫感も覚えなかった。付言しなければならないが、沈黙はこの患者の治療中、前にも何回か起っていたので、患者も分析者も耐える訓練はある程度済ませていたわけである。沈

黙を突然破ったのは患者のほうだった。患者はすすり泣きはじめた。沈黙はこれで終わり、まもなく忠者は口がきけるようになった。患者は分析者に話した、**とうとう私は自分自身になれたのだ**、と。患者は幼年時代この方ひとりで放って置かれたことがなく、いつも誰かがそばにいて、何々をしなさいと言ってきたのだった。何回か後の面接で患者は、**『沈黙している間中、ありとあらゆる連想が湧いてきたが、どうでもよいもの、ただ邪魔するだけの表面的な有害物だ、と全部斥けていました』**とうちあけてくれた」。

（中略）この重要な相違は、換言すれば、**外的世界では何ひとつ生じず、外界はひっそりと静かなばかりで、患者の心の平和を乱さないこと**にある。このため患者は内面生活を前進させ、慣習的・自動的と化していた外的世界や外界と関連する体験様式を――すくなくとも分析の場においては――無用で無根拠で、的外れなものだったことに気づく。この**開眼**が**新規蒔き直し[new beginning]**のいとぐちである。古い自動的な関係形式はなくなり、代って別の新しいものが始まる。それは患者に重要な対象との、より満足な関係を樹立させるだろう。

分析の場における**沈黙の意味**には二つあるだろうということには皆同意していただけると思う。ひとつは**恐ろしい空虚という戦慄的な体験**をしている場合である。空虚は疑惑に満ち、敵意に満ち、拒絶に満ち、攻撃性に満ちている。前進を阻む沈黙であり、結局不毛に終わる沈黙である。しかしまた、沈黙が**おだやかな静かな調和体験**の場合もある。平和と信頼と受容という雰囲気である。つまりおだやかな成長の時期、統合の時期でもありうるのだ。分析家にもっとも必要なのは、今向かいあっている沈黙がどちらの型なのかを識別することである。

フィロバティズム的偏向をもつ技法においては、おそらく、解釈をわずかしか用いないだろう。特に退行した患者に対する時はそうなるだろう。分析者はたえず患者を見て、[次の]どちらの態度をとるべきか考えるだろう。すなわち、個別的な対象の役割をとり、退行した**患者を安全な距離が見守り**、この冷静で客観的な視座からことばで綴った解釈を与えて理解を求めるのがよいのか、あるいは**自分も「友好的広がり」の一部と化して、何一つ要求せず、ただ息をしているだけの存在としてあり、**患者に欲求が起これば即そく役に立とうとする構えだけは持ちつづけるのがよいのかを考えるのである。（中略） 最大の危険は、この技法が患者にあまりに多くをゆだね、**早すぎる時期に大きすぎる独立性を押しつけること**であろう。

（中略）[もう]ひとつは**オクノフォリックな方法**であって**「患者の手をとって」ゆく方法**である。どうしてこの動きをしてあの動きをしなかったのかを一貫性を以て解釈してゆくことである。ここに内在する危機としては、患者が分析家を理想化してこれを寛大で慈愛こもった人物として取り入れるように誘導する恐れがある。こうなると患者の自由が制限されて、理想化された対象が処方し許容してくれる範囲から出られなくなってしまう。

自由とは、私の考えでは**「友好的広がり」の再発見**のことである。それはフィロバティックな世界の中にあって、成人的なスキルを身に付けることを要求するものであるが、その背後には、何も要求せずに抱きかかえてくれる一次愛の世界が控えている。誤解されると困るので、「友好的広がり」の再発見があらゆる対象を完全にあきらめることを意味するものではないことを言っておかねばならない。そうではなくて、それはただ、**[オクノフォリックな]絶望的なしがみつきをやめて対象から一定の距離を置いて独りで立つ能力すなわちスキルを身につける**だけのことであり、そしてそうすることは**対象を「正しい釣り合いにおいて」眺め、「真のパースペクティヴ」の中で対象を獲得する**ために必要なのである。

新規蒔き直し時期における分析者の役割は、多くの点で一次物質あるいは一次対象の役割に似ている。**分析者は存在していなければならない。分析者は高度に可塑的でなければならない。あまり抵抗してはならない。破壊不能性を示さねばならない。**これは確かなことだ。また**一種の相互滲透的調和渾然体の中で分析者と共に生きること**を患者に許容しなければならない。（中略） おおよそ、**友好的物質**という、一点の曇りない調和体だけがあり、その中から対象が成立する以前の体験である。

○「欲求充足を目的とする退行」ではない「認識されることを目的とする退行」（訳書 B pp.190-1）
○対象関係は feeling である（訳書 B p.211）
○オクノフィリアとフィロバティズムの往復の必要性（訳

書 B p.217）

○「新規蒔き直し」の後にたどり着くもの（訳書 B p.238-45）

［退行の］良性形では、**患者はさほど外的行動[を治療者に「してもらう」こと]による満足を求めず**、それよりも外的世界を活用して自己の内面の問題に前途の途がひらけること、私の患者のことばを借りれば”自分自身に到達できるようになること”をそっと**認めて**いてほしいと希う。

（中略） 認識されるための退行（中略）では、あたかも大地や水が己れの体重を安んじてあずける者を支え返してくれるように、患者を受容し支え荷うことを引き受ける周囲の人々のいることが前提である。**物質としての治療者は抵抗してはならない。引き受けねばならない。あまり摩擦を起こしてはならない。患者をある期間受容し荷い、自分は潰れないことを示さねばならぬ。境界線を越えないぞとつれなく言い通してはならない。患者と自分との一種の渾然体の発生展開をゆるさねばならない。**

以上はすべて、患者に同意し、関与し、巻き込まれることを意味するが、必ずしも具体的働きかけをする意味ではない。ただ理解と寛容だけでよい。ほんとうに大事なのは患者の内面つまりその心の中でさまざまの出来事が生じうる条件を維持し創造することだ。[分析者は患者を**積極的に荷おうとはせずに、**水が泳ぐ人を支え、大地が歩む人を支える具合に荷い支えるべきであるということ。すなわち患者のために存在し、またそうされることにあまり抵抗を感じないで**患者に使用されること**である （訳書 B p.218）]

我々は**立居振舞(behavior)、空気(climate)、雰囲気(atmosphere)**などのことばを使うが、これらは皆、漠然としたカスミのかかったような、画然たる境界を欠くものを指すことばで、（中略）にもかかわらず**”雰囲気””空気”というものは存在し、感じ取られ、しばしばことばでの表現を要しない**。（中略） ”洞察”とは的を得た解釈の結果生まれるものだが、**洞察が生まれるにふさわしい対象関係が創出されたならば、その結果は一種の”感じ(feeling)”である**。”洞察(insight)”が視覚と対応するとすれば”感じ(feeling)”は触覚と対応する。すなわち一次関係かさもなくばオクノフィリアである。

ある一種類の対象関係に硬直的に固執すべきではなく、**いつでも患者とともにオクノフィリア的とフィロバティズム的の両原始世界を往復する心構えが必要**であり、時には両世界の彼方の一次関係まで行く心構えがなければならない。

（中略） 解釈は、分析者が「患者は確かに解釈を求めている」と確信できる時に限り与えるべきものである。こういう時に解釈を与えないことを不当な要求あるいは刺激と感じるだろうからである。

（中略）仮に分析者が以上の条件の大部分を留保ぬきで誠実に満たすことができれば、ここに新しい関係が生まれ、それによって、患者は、自己の精神構造の欠損あるいは瘢痕形成の原因となったそもそもの欠陥と喪失の悔みと悼みをある形で体験できるようになる。その悼みは、現実に愛する人の喪失や、内的対象への打撃あるいはその破壊という、メランコリー[抑うつポジション]特有の事態が原因で生じる悼みとは全然別物である。私がいま頭に抱いている悔み悼みとは、自分自身の中に欠陥・欠損があるという動かしえない事実に対する悔みであり悼みである。（原注：この悼みは、元来基底欠損に対する過剰代償として生じたらしい**ナルシシズム的自己像を断念すること**[発表者注：**世界との、他者との全き調和の断念。自己のスキルに対する万能感の断念**…とも読解できよう]と関連した悼みである。（後略））

（中略） 分析者がこの悼みのための時間を焦らずに十分長くとり、またその間、必須の原初的雰囲気を寛容と干渉的でない解釈によって維持できるならば、患者と分析者の共同作業の仕方は以前とは少しずつ変わってくる。それは、まるで、患者が対象との関係における自己の位置付けを進んでやり直し、自己の周囲の、魅力を欠き冷淡なことの少なくない世界を受容できないかと考え直そうとし、またその力が出てきた気がしはじめたことを思わせるような変化である。